



「血の通った壁」になること

優しさといえば、「笑顔」や「包容力」などを思い浮かべることができます。それは、もちろんそれとおりで、それによって癒やされ、苦しさを乗り越えることは、よくあることです。

一方、困難な状況が発生したときや相手の感情が高ぶっているときなど、「血の通った壁」になることが、子供にはなかなかできない大人の優しさなのではないかと思うのです。

人間として自立しようとしている思春期の子供たちは、時に、感情にまかせて行動したり、ルールを破ってしまったりすることもあります。

こんな話を聞いたことがあります。暴走族に入り、道路を暴走したり、器物破損を繰り返したりして、警察に補導された少年が、警察官に「捕まって、ほっとした。捕まっていなかったら、これ以上のことをしてしまったかもしれない。」と言ったそうです。この場合、警察官が、「ダメなことはダメ」というメッセージを伝え、この少年の「壁」になってくれたのだと思います。

ここまで、極端な話ではなくても、自分で悪いと分かっている行動してしまっているとき、心の奥底で、それを止めてくれる人を欲している子供はいるはずで。

今、コロナ禍で、出口の見えない閉塞感が漂っています。人は、社会の雰囲気の影響されやすい生き物ですから、このようなときの感情のコントロールには注意していかなければなりません。(もちろん、自戒を込めてですが。)

何ができて、何ができないのかをみんなで考えていく必要があります。そのために必要なのは「対話」です。独りよがりの考え方に陥らないようにするためにも、「対話」を重ねていくことが大切です。なかなか結論が難しい問題もあると思います。それでも、対話を続けていくことに大きな意味があります。それが、感情任せの行動や極端な結論を回避することにつながります。

世界の情勢を見ても同じです。なかなか解決が難しい問題が山積しています。しかし、「対話」を途切らせてしまえば、待っているのは「分断」です。

思うがままにならないこの状況の時だからこそ、これからの世の中を創っていく子供たちは、考える力を身に付けるチャンスがあります。

しかし、子供が極端な結論を出そうとしているとき、「血の通った壁」になるのが大人の役割です。「血の通った」というところがポイントです。なかなか正解がすぐには分からないこともありますが、「投げやりにならないように考えさせてあげようとする気持ち」、「人の道にはずれないように守ってあげる気持ち」、そして何より「子供の成長を心から応援してあげたいと思う気持ち」が「壁」になるときに大切なことではないでしょうか。大人は、時に辛い役回りをしなければならないことがありますが、それでも「壁」になって子供を想う気持ちは、いつか必ず通じると信じています。

